

夏場に流行る感染症

— 予防と早期発見, 看護のポイント —

【特集にあたって】

感染症の基礎的な知識を習得し, 適切なケアを提供しよう

本誌2015(平成27)年7月号の特集では「旅行する子どもの病気への対処」が企画され, 海外渡航関連の感染症に関して取り上げたところ, 大きな反響がありました。2014(平成26)年の夏, 「代々木公園で, 国内では69年ぶりとなるデング熱の感染が確認され, 同10月末までに感染者は全国で160人に上った」というニュースは記憶に新しいのではないのでしょうか。重篤化エンテロウイルスは16年前に脳症を合併するエンテロ71が流行し, 2015年には, エンテロD68感染後の弛緩性麻痺が問題となっていました。さらに, 2015年は手足口病が例年以上に流行し, ウイルスが変性しているためか, 重症化する子どももいました。

そこで, 本特集では「夏場に流行る感染症」というテーマで看護師が知識として身につけておくべき内容を執筆いただきました。

感染症といえば, 冬に患者数が増加, 重篤化するものであり, 夏休みの期間は子ども同士が接触する機会が減るため, こういった感染症は流行しないのではないかと疑問をもたれるかもしれません。そこで, 診療所の医師, 看護師への聞き取りをしたところ, 「以前は受診者数が減少する傾向にあったが, ここ数年, 夏休み期間の患者数が減少することがない」という回答を得ました。これは昨今, 共働きの増加によって, 保育所に通う子どもが増えており, 保育所には夏休みがほとんどないためであると考えられます。

また, 地域包括ケアシステムが進められているなか, 病院在院日数は年々減少しており, 通院治療, 在宅療養をする子どもが増えています。そして, 医療の進歩によって慢

性疾患患者の長期生存が可能となり, 疾患や治療法によっては免疫が低下しているながら地域で暮らしている子どもがいます。このような子どもたちは, 感染症に対する抵抗力が弱く, 時には命を落とすことにつながることもあるでしょう。感染症の対応には, 限界があるのかもしれませんが, 医療者として正しい知識をもち, 適切な治療, ケアが提供されるよう努力していく必要があると考えます。

看護の分野では, 感染症看護専門看護師, 感染管理認定看護師など感染症に関するスペシャリストが誕生し活躍しています。また, 小児医療の分野では, 小児感染症科として専門的に展開している施設もあります。しかし, 感染症に罹患した子どもと家族が初めに向かうのはおそらく近くにある小児科の診療所でしょう。そして慢性疾患をもつ子どもは, かかりつけの病院を受診するのではないのでしょうか。専門医, 専門的な知識をもつ看護師がいつもそばにいるとは限らないなかで, 一般的な診療所, 小児科外来, 小児病棟に勤める看護師が必要とする内容を本特集で扱っています。感染症にかかったときの身体に起こる制御反応などの基本的なメカニズム, 夏場に流行る感染症の代表的な疾患について, 特徴の異なる施設において感染症の子どもへのケアの実際を執筆いただいております。本特集が日々のケアに生かされますことを願うとともに, お忙しいなかで協力いただきました執筆者の皆様にご心より感謝を申し上げます。

名古屋第二赤十字病院看護師長 / 小児看護専門看護師

太田有美 Ota Arimi